

千葉県立関宿城博物館

企画展「つながる 川と海と人～あそぶ・親しむ・守る～」

開催期間：平成28年10月4日（火）～平成28年11月27日（日）



【企画展の内容・目的】

- 海や川は、古くから人々にとって脅威と恩恵の対象であった。江戸時代後期から庶民の間にも「遊ぶ」意識が芽生え、魚釣りや潮干狩りなどで楽しむようになった。海に「遊ぶ」意識は、時代とともに「親しむ」意識へ、さらに「守る」意識へと広がっていったことを紹介し、「親水」をとおして海が私たちにとっていかに大切であることを伝える展示とした。
- 展示期間中に「歴史講座」や、貝殻や海辺の石を使った工作、魚拓づくりなどの「体験教室」を実施し、海の生き物や環境保全にもつながる企画展のテーマに対する理解を深めるとともに、海や海辺での学習につながる興味を喚起した。
- 人々が海や川に親しんできたようすを歴史的な資料から理解してもらうために、浮世絵や古写真なども多く展示した。
- 海で「遊ぶ」意識が芽生えた社会的状況などを知り、海辺の環境が都市生活者の生活の豊かさをもたらすことを学ぶことを目的とした。

1. 企画展示の内容

- 開催期間：平成28年10月4日（火）～平成28年11月27日（日）
- 開催場所：千葉県立関宿城博物館 企画展示室ほか
- 入場者数：12,790人



千葉県立関宿城博物館 外観



企画展会場 入口



展示会場に入ると、まず目に付くのがヨットの展示である。バックには海岸を写したタペストリーを配し、海に親しむ雰囲気を出した。

あいさつパネルに続き、関東地方の海浜公園・親水公園マップパネルを掲示し、企画展の導入とした。これらの公園は、周囲の自然が減少したような都市部に多く設置されていることに展示を通して来館者に気づいていただく契機とすることで、逆に都市部でも海とふれ合えることを認識していただく機会となった。

序章「人と水とのかかわり」では、海と川における漁業や利水、治水、親水について浮世絵や写真などの資料で概観し、展示の流れや水の大切さを伝えた。関宿城の城絵図からは、周囲の川と堀によって城が守られていた様子と、水の管理が必要だったことが分かる。

千葉県は海と川に囲まれ、古くから漁業も盛んで数々の恩恵を受けてきたが、海や川は時折人々に災害をもたらす。災害から生活を守るためには治水が必要であるが、洪水や津波被害の写真などを展示し、水の脅威に対して継続した治水が必要であることを伝える展示とした。



1章「癒しの空間」では、水辺が人々にどのように親しまれてきたかを、大名庭園や水辺での花火、親水空間への観光のようすなどで紹介した。江戸の庭園は、明暦の大火（1657）をきっかけに幕府が火除け地として造ったのがはじまりであるが、これらの池には海や川とつなげ、領地から届く名産品を受け取る場所として利用されたものもあった。中でも浜離宮庭園や清澄庭園は、潮の満ち引きを利用して、池の景観が変化することを楽しむための趣向が凝らされ、海と連動した庭園であることを紹介した。また、昔から花火は水辺で行われるイベントの代表であるが、両国花火に関する浮世絵を展示したり、品川沖に出現した鯨見物の浮世絵を展示し、水辺には期待感があり、自然のイベント会場としても賑わったことを紹介した。本章の最後は観光と親水である。かつては水辺の観光地に向かう手段は船が多く、船に乗り水面を進むことでも人々は癒されることを伝えた。また、地引き網の絵葉書からは、漁業風景を見学することも海辺での楽しみであることを紹介した。以上の展示から、人々の生活にゆとりが生じてくると、海で「遊ぶ」意識が芽生え、海辺の環境が都市生活者の生活の豊かさをもたらすことを学んだ。



2章「レジャーとしての親水」では、人々が水辺の空間を楽しむだけでなく、積極的に水に接していくような親水意識の変化を紹介した。古くからある親水レジャーとして、潮干狩りや釣りがある。これらを描いた浮世絵も多く、当時の風俗を知ることができるとともに、人々が海や川で趣味を楽しんでいる様子が理解できる。海や川から、人々が精神的な満足感や充実感を得ていることに気づくことができる。明治時代以降は、スポーツという意識が加わり、親水レジャーもヨットやカヌー、サーフィンなどのマリンスポーツが加わり多様化していく。水泳は、戦前までは川で行うことが多かったが、戦後、排水などの影響で川が汚れだし、徐々に海水浴が増えていった。人々の親水意識は、環境の変化と強く関わっているが、戦後まもなくの頃にも既にそうした兆候があったことを伝え、続く3章への足がかりとした。

以上の展示から、「レジャーとしての親水」が人々に海への興味・関心をもたせるきっかけとなっていたことを学んだ。



3章「変わる親水意識」では、昭和の高度成長期になると海や川の水質悪化が進み、人々を水辺から遠ざけたが、そこからの新たな親水に対する国や地方自治体、民間など様々な人々の取組を紹介した。

それらの取組を紹介するために、海浜公園や親水公園、ビオトープの設置に関連する資料を展示した。昭和49年（1974）に日本で初めての親水公園が江戸川区に造られたことや、検見川浜海浜公園は昭和50年から整備が始まり、日本初の人工海浜が造られたこと、葛西臨海公園は、東京都が東京湾沿岸の自然環境を再生するために整備した公園で、その後沖合の三枚洲という干潟を保護・再生するために葛西海浜公園が設置されたことなど、人々が行った自然保護運動によって、再び人々に海辺が戻ってきたことを紹介した。また、ユリカモメやカワウの剥製を展示し、水辺の生態系のうち鳥類は頂点に位置することから、水辺で鳥を観察すると、その水辺が健全かどうか分かることを紹介した。以上の展示から、海が抱えている問題とその解決策の一例を知ってもらい、海やそこでの生態を守るために何ができるのか考える機会とした。

最後の4章「つながる 川と海と人」では、前章での自然保護運動が、もはや人のためだけでなく、多様な生物全てが住みやすい環境を作るための活動となっていることを紹介した。漁業においては、漁場の回復を目指す魚付き林の再生や、河川とその先の森林の再生と保護の取組、また親水という観点からは公的機関だけでなく、住民や研究者、企業も海に関わる自然環境の保全と未来に向けての保持、発展に向け人力を尽くしていることを紹介し、人々にとっていかに海が大切で、大切な海を守るためにどのような努力をしていくべきかを考える機会とした。

【来館者の声】

- 海をもっと大切に。地上から汚れ物を流さないで。(70代男性)
- 身近にある川や海は、昔から生活の一部だった。大切な場所であり、欠かせない場所。人々は守りながら逆に助けられながら暮らしてきたのだと改めて考えさせられる。(50代女性)
- 海のことをもっと知りたくなりました。(9歳男子)
- 皆が意識を持って海を守りたいものです。(60代男性)
- 海はとてもだいじなことを知って、良かったです。(8歳女子)
- 普段考えることの少ない「海」について、新たに強い思いを感じる事ができたような気がします。大切な海を大事にしなければと思う。(70代男性)
- 身近に海があることを幸せに感じました。(60代男性・60代女性)

2. 関連事業の内容

■歴史講座「つながる 川と海と人-水都東京の歴史と再生-」

【開催日時】平成28年10月23日（日）13:30～15:30

【開催場所】千葉県立関宿城博物館 集会室

【参加者数】28人

【実施内容・目的】

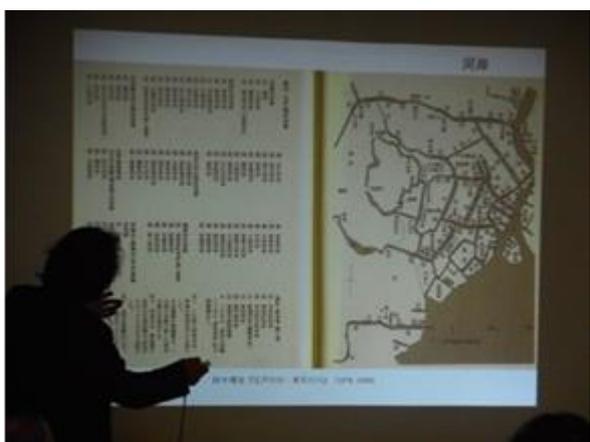
- 法政大学教授の陣内秀信氏を講師として招き、世界で類を見ない多種多様な水辺空間をもつ東京と、東京湾に流れ込む川や濠・運河・湾岸における親水を中心とした歴史を紹介するとともに、未来に向かって人々が海や川とどう向き合っていくべきかを考える機会とした。
- 水都東京における親水の歴史を様々な角度から専門的に紹介することにより、海的环境保全と活用について、理解を深めた。



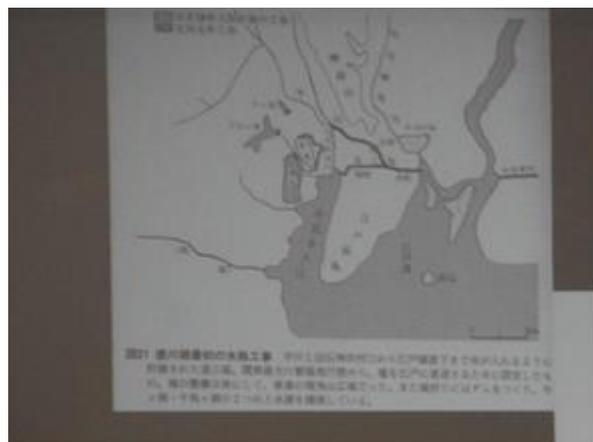
会場の様子



講師の陣内先生



江戸・東京を“水の都”と位置づけ、水都学を確立させた法政大学デザイン工学部・陣内秀信教授から、水都東京が洪水から自らを守りながら水に親しむ都市を育ててきた過程について、1980年頃から始まった研究の、現在までの成果をリアルタイムで解説していただいた。これにより、東京湾とそこにつながる水路の仕組みや環境について、興味を持つきっかけとなった。



陣内先生の作成したパワーポイントの豊富な画像を使って、水の都である東京が発展してきた様子を紹介。東京は、水とつながってできた都市であること、しかも古さと新しさが調和した都市であることなどを解説され、私たちの身近に海があることの幸せや大切さを知る機会となった。



江戸時代から現在の東京、そして未来に期待できる東京の姿を解説された。中でも2020年に開催される東京オリンピックでは、湾岸エリアを有効に活用することで、世界初の水上でのオリンピックになるだろうとのことである。東京には海を感じながら生活することができる空間があり、その発展に期待性があることを知る機会となった。

【来館者の声】

- 身近に海があることに幸せを感じました。
- 身近だった昔の海が少しわかった。
- 海と生活についての関連を学ぶことができた。

■展示会場内の解説会

【開催日時】①平成28年11月3日（祝・木） 11:00～12:00
13:30～14:30
②平成28年11月23日（祝・水） 11:00～12:00
13:30～14:30

【開催場所】千葉県立関宿城博物館 企画展示室ほか

【参加者数】①67人 ②41人

【実施内容・目的】

- 企画展を担当した学芸員が、展示の流れと展示した資料について解説を行った。
- 海や川に遊び、親しむことから、人と海や川がどうつながっているかについても紹介し、海や川を大切にすることを喚起するよう心がけた。



開催場所の様子



エントランスホールでの説明



企画展を担当した学芸員による解説会を2日間の午前午後で合計4回実施した。参加者にエントランスホールへの集合を呼びかけ、企画展のテーマとエントランスホールで実施している関連事業について説明した後、企画展展示会場へと誘導した。

会場への途中、通路に関連展示として掲示してある「水辺のいきものをさがそう」についても紹介し、海や川の自然環境に対する興味を喚起した。



解説では、人々の海や川に対する「親水」がどのように変化してきたかについて重点を置いた。

最初は海や川と直接関わる者が、その恩恵や脅威を理解しながら水と親しんでいたのだが、次第に旅行やレジャーを通じて、そこに住んでいる人だけでなく、様々な人々が海に出かけて親しむようになった歴史を紹介し、人々とどうして海や川がつながり、親しみ、大切になっていったのかを知る機会とした。



人々が海や川に親しむために、これまでに様々な環境の改善や保全の活動があった。そのような努力があって、現在そして未来への海に親しむ環境ができていっているということを紹介した。

アンケートの回答からは、過去の環境改善や保全を行ってきた人たちに対する感謝の声も多く聞かれ、人と人、人と海などの様々なつながりが、海や川を健全にしていくことを知る機会となった。

【来館者の声】

- 明治から昭和にかけての海と人とのつながりが分かった。
- 海のことをもっと知りたくなった。
- みんなが意識して海を守りたいものです。
- 千葉県は海に囲まれ、色々な意味で恵まれている。子供の頃から海に囲まれて育ち、千葉に来てからも海に力をもらっているので、これからも海を大切にしていきたい。
- 昔の人々の努力があって、今の生活があるのだなと感謝の気持ちが湧きました。

■体験教室「海や川に親しもう！」

- 【開催日時】 ①「石を魚に変身させよう！」平成28年10月8日（土）
②「貝殻工作」平成28年11月5日（土）
③「魚拓を作ろう！」平成28年11月12日（土）
いずれも 11:00～12:00
14:00～15:00

【開催場所】千葉県立関宿城博物館 エントランスホール

【参加者数】①19人 ②25人 ③24人

【実施内容・目的】

- 子どもたちが海や川に親しみ、海のいきものや自然について関心を持ってもらうために、身近な材料を使った体験教室を実施した。
- 海辺や川原から集めた石に絵付けを行い、魚などの生き物を作ったり、貝殻で海の風景の額を作ったり、魚拓作りを体験することで、より海を身近に、親しんでいただく機会とした。



開催場所の様子



「魚拓を作ろう！」の様子



海辺のいきものや自然について、親しみ、ふれあいながら楽しく学ぶことを目的に、体験教室を3回実施した。

「石を魚に変身させよう！」では、海辺や川原から集めた石に油性ペンで色つけして魚などを描く体験を行った。

子どもたちの感性と想像力で、生き生きとした魚が完成した。また、大人には海辺や川の石についての簡単な説明を行ったことで、海が持つ自然の大切さを知る機会となった。



「貝殻工作」では、海辺の貝殻を使って小さな額の中に海辺の風景を作った。海辺で拾える貝殻が、小さな額に入って空や海の色をつけると立派な海辺の風景になった。

海に行きたくなったという声も聞かれ、自然とのふれあいができる海辺に行って学びたい機会となった。



「魚拓を作ろう！」では、スーパーで売っているアジや小鯛などの魚を使って、魚拓作りに挑戦した。

特に魚を触れないという子どもはいなかったが、みんな魚を丁寧に扱っていたのが印象的であった。

魚などの海のいきものに対して、命や環境を大切にしようとする意識が感じられ、海からの恵みがいかに私たちの生活にかかせないものかを学ぶ機会となった。

【来館者の声】

- 石に絵を描かせる行事に参加できて、自然の大切さを感じました。
- 貝殻工作に参加して海岸の風景を楽しく作ることができた。子どもの頃、海で遊んだことを思い出しました。
- 魚拓作りが面白かった。昔に思いを馳せて、海をきれいに保ちたいと思いました。
- 魚拓はやってみると難しかった。
- 魚拓、楽しかったです。初めて体験しましたが、魚を食べる以外で触ったのは不思議な感じでした。
- 魚がいつまでも元気で泳げればと感じました。

■ワークショップ ぬりえ「水辺の自然環境をつくろう」

【開催日時】企画展開催中随時

【開催場所】千葉県立関宿城博物館 エントランスホール

【参加者数】593人

【実施内容・目的】

- 子どもたちが海や川に親しみ、水辺の自然環境について関心を持ってもらうために、魚や貝・鳥・船などのシールに色を塗り、自然環境を描いたボードに貼ってもらった。
- 貼られたシールが増えてくると、水辺の環境に魚や鳥などの生きものが増える。みんなが参加して自然環境をつくり、守ることが大切だということ意識づけるきっかけとした。



開催場所の様子



「ワークショップ」の様子



ワークショップとして、ぬりえ「水辺の自然環境をつくろう」コーナーをエントランスホールに設置し、来館者が自由に参加して、自然環境を作り上げてもらうものとした。子どもたちが海を知ること興味・関心を持ち、実際に海へ行ったり、そこでの環境を守ろうとする動機づけとした。

【来館者の声】

- 船は海を渡るのに、とても大切だと思った。(9歳男子)
- 海が一番きれい。(9歳女子)
- 魚がいつまでもいればいいと思った。(6歳男子)

【事業全体のまとめ】

- 中川船番所資料館や浦安市郷土博物館とは、展示資料の借用をとおして様々な情報を提供してもらい、今後につながる協力体制が構築できた。
- 企画展のテーマとして海や川との「親水」を扱い、好評であったことから、「川の歴史」を主テーマとする当館でも、「海の学び」を加えて新鮮な企画展とすることができた。
- 主たる展示のほか、付帯事業として歴史講座や、解説会、体験教室を実施することで、幅広い年齢層の方に企画展の趣旨である「あそぶ・親しむ・守る」を伝えることができた。
- 展示に環境保護を組み込んだため、癒しとしての海や川の存在と、その事象を認識してもらうことができた。
- アンケートの回答からは、「海を大切にしたい」、「海を守りたい」、「海に感謝したい」という感想が多く聞かれ、本企画展の目的が理解されたことを感じる。

3. 主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 千葉県立中央博物館分館海の博物館	展示資料の借用と情報の提供
2. 千葉県生物多様性センター	活動内容についての情報及びパンフレットの提供
3. 中川船番所資料館	展示資料の借用と情報の提供
4. 浦安市郷土博物館	展示資料の借用と情報の提供
5. NPO 法人川崎海の歴史保存会	展示資料及び画像の借用
6. 品川区立品川歴史館	展示資料の借用と情報の提供
7. 我孫子市鳥の博物館	展示資料の借用と情報の提供
8. 野田市立せきやど図書館	展示関係図書リストアップにより利用の便を図った。

4. 主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. 朝日新聞	人と川・海 親水の歴史 H28.10.13
2. リビングかしわ第 1946 号	企画展「つながる 川と海と人」開催 H28.10.29
3. 月刊「とも」No447	つながる川と海と人 県立関宿城博物館 H28.10.1
4. のだジャーナル第 1500 号	10 月 23 日歴史講座「つながる 川と海と人」 H28.10.5

以上